

法然上人の浄土開宗に関する諸問題

坪 井 俊 映

法然上人は選択集の初めに道緯の安樂集に説く聖浄二門の教説をあげて、聖道門に対して浄土門の独立すべきことをあかし、また和語燈録に「我今浄土宗を立てる意趣は凡夫の往生を示さんがためなり」いつて、凡夫往生のために浄土一宗を別立すべきことを説いている。これは親鸞が新宗派の開創を意識することなく、後世になつて真宗開祖と仰がれたとは異つてゐる。この法然上人の浄土宗開創の年次について、現今、定説となつてゐるのは四十八巻伝に「承安五年の春、生年四十三才、たちどころに余行をすて一向に念仏に帰し給ひけり」とある文であつて、この年次をもつて一般に立教開宗としてゐる。

しかるに戦後、國史の研究が盛んになり、法然上人伝の研究が宗内外の学者によつて行われると共に、浄土開宗年次の問題が、これらの人々によつて盛に論述されるに至つた。次にその代表的な説を記述する。

一 椎尾升匡博士は日本浄土教の中核において、定説とされる四十三才立教開宗説を否定して四十三才の下山は高倉天皇に授戒のためであつて、この時浄土宗教団を開創したとは云えない。上人の思想の一大転換により専修念仏の行者となつた時が開宗であるとし、

思想信仰の深化の面より見て、四十三才以後を十年一期として四期に分ち、才三期（六十三才 七十三才頃まで）の凡入報土、選択本願念仏 顕揚の時が新宗別立の時とされている。

即ち選択集述作の年（六十六才）前後に新宗開創を見ていられる様である。

二、重松明久氏は論文「浄土宗確立過程における法然と兼実との関係」（名大文学部研究論集）にて、浄土随聞記、還北越書等により、六十六才選択集述作の年をもつて開宗宣言としてゐる。

三、田村円澄氏は法然上人伝の研究にて、四十三才は叡山を離れた年であつて、開宗ではないとし、専修念仏に帰入して後の授戒は「法然自身の偽れる装である」という。

四、井上光貞氏は日本浄土教成立史の研究において、選択本願念仏説は建久元年（法然五十八才）作とする三部経釈以後に見えるから、この時まで、この考えが成立していたことは明らかである。従つて専念主義帰人は離山を含む前後相当長い間を想定すべしといつて、四十三才より五十八才までに専念主義の帰入即ち浄土開宗があつたとされる。

五、福井康順博士は日本印度学仏教学研究才十号にて、七ヶ条起請文、送山門起請文の内容より考へて、これらの起請文を書かれた時七十二才までは天台宗を離れることは出来なかつた従つて真の立教開宗は七十二才以後にありとされている。

以上を要約すると開宗年次について一番若い年代を主張するのは井上光貞氏で四十三才より五十八才まで、一番老年とされるは福井康順博士で七十二才以後、椎尾博士と重松氏とは大体類似してゐて、六十六才又はその前後に開宗があるとされる。

このうち福井康順博士の説は、その立論の根拠とされる七ヶ条制誡、送山門起請文が法然滅後に造られたと考へられるから（日本印度学仏教学研究一一号の拙稿）この説は再考すべき余地があり、重松氏の選択集述作の年とする説は、これは藤原兼実の請によりて法然上人が自己

の思想信仰を述べられたものであるから、この時までには浄土門の独立と選択本願念仏説の思想のあつたことが考えられる。従つてこの選択集述作の六十六才は専修念仏帰入の最上年限を示すものとすることができ。されば最上線を六十六才選択集述作において、最下線を井上光貞氏のいう如く、叡山の離脱におくと、四十三より六十六才までの二十三年間に、法然上人の思想に大なる転換があつたと考えられる。この間における記録さるべき事象として、大原談義（文治二年五十四才）、東大寺の三經講説（建久元年五十八才）逆修説法（師秀逆修、建久五年六十二才）、選択集述作（建久九年六十六才）の四の出来事である。それでこれらの著作に現われた法然上人の思想信仰の進展変化を見るならば、偏依善導、選択本願念仏説、凡入報土等の特異な教説の現われからたによつて、専修念仏帰入の年次が推定せられる。それで椎尾博士が言われる如く、「思想の進展によつて、専修念仏行者となつたのが立教開宗である」とするならば、大体六十才前後をもつて浄土開宗とすべきである。かくの如く諸学者は承安五年四十三才浄土開宗の定説を否定して新しい開宗年次を主張されている。私もこの説には賛意を表するものであるが、開宗の契機を思想進展の後にのみ求めて、かかる特色ある思想を生んだ基礎母体たる法然の善導教學受容についての考察が略されていることについては一考すべき余地がある。

法然上人の浄土教は恵心の往生要集の浄土教の延長ではなく、これを超えて善導の浄土教に帰入し、これを母体として出来上つたものが、選択本願念仏、凡入報土説等の特異ある法然浄土教である。往生要集の浄土教は黒谷に籠居されているとき、即ち青年時代に接触されたのであるから、それ以後選択本願念仏説を主張される六十才前後までに恵心より善導への思想転換

があつたと考える。この思想転換の契機として最近法然の南都遊学が諸学者によりて取りあげられている。この南都遊学、諸学者歴訪の時期、期間が何年であつたかは詳しく知ることが出来ないが、南都三論系の浄土教学者、永観、珍海、重誉の如き善導の思想を濃厚に受け入れた人師の浄土教に大きな影響を受けられたことは言をまたない。かくして恵心の往生要集の浄土教より善導の浄土教に帰入された。

法然上人の生涯を通じて展開した浄土思想について、往生要集の浄土教の時代と善導の浄土教の時代とに区分して考えることが出来る、それで善導の浄土教に帰入した時をもつて立教開宗の時期とするか、または選択本願念仏説等の特異なる法然教義が樹立された時をもつて立教開宗とするかは、学者の見解によつてそれぞれ相違が出来てくる。上記の椎尾博士等の諸学者の考えは、いづれも選択本願念仏説樹立の時をもつて立教開宗とされているのである。

されば法然上人門下並にその伝記作者達はこれをいかに考えていたか。四十八巻伝によると、承安五年四十三才の時、善導の疏によりて念仏に帰一し、まもなく黒谷を去つて西山広谷に行かれたとする。そしてこの四十三才を契機として自行化他に歩まれたとしている。これが従来いわれている立教開宗の年次である。これより古い成立といわれる諸伝記を見ると次の如くなっている。

九巻伝（具名は法然上人伝記九巻）によると四十三才の時をもつて黒谷を去られた年とし、「吉水に住し浄土の法門を談ず」とあり、善導観經疏の一心専念の文による善導の浄土教帰入をそれ以前としている。

覚如の拾遺古徳伝では、四十三才黒谷を出て吉水に住す」とあつて、四十二才に黒谷を離別

したとし、善導浄土教帰入をそれ以前としてゐる。しかしこの善導浄土教帰入について、「往生要集を先達として浄土門に入る」とし、「観経疏を三度び見て浄土宗義を得たり」と記している。これには一心専念の文は記述されていない。

弘願本（具名は法然聖人絵）では、「承安四年春四十二才黒谷を出て、吉水に住して他を利益する」という。善導浄土教帰入については記述していない。

四巻伝（具名は本朝祖師伝記絵詞四巻）によると安元元年（承安五年）四十三才より諸経所讃多在彌陀の文により毎日七万遍の念仏を唱える」といつて、観経疏にあかす上来雖説定散両門之益……彌陀仏名の文を記して、「上人閑に浄土を觀じ給い」七万遍の念仏者となつたことを記している。それでこの四巻伝では、四十三才は、念仏行者になつた年であつて、叡山離別の年としてない。而もこの伝では念仏門に入つた契機として天台浄土教と善導浄土教とが同じ比重で取り扱われている。

醍醐本（具名は法然上人伝記）では、これについて明確な年代を記述していないが、四十余年天台を習學し、往生要集を先達として浄土門に入り、善導の疏によつて乱想凡夫の浄土往生の道理を知つたとする。従つて四十才を過ぎてから往生要集によつて浄土門に入つたことになる。これには一心専念の文はない。

私日記（具名は源空聖人私日記）には安元元年（承安五年）四十三才の時、浄土門に入り、閑かに浄土を觀ずとあるから、これは往生要集の念仏を修していたことが知られる。これには叡山離脱のことは記述していない。

かくの如く諸伝記の記事を比較して見ると、私日記、醍醐本、四巻伝は四十三才をもつて浄

土門に入つた年とし、その契機として往生要集が大きく取り扱われている。そして善導の觀經疏はそれ以後のこととしている。しかし法然のさつた所のものは往生要集の念仏ではなく、善導の浄土教であつて、乱想の凡夫の浄土往生は称名念仏にあることを強調している。

而るにこれが上記三伝より後に成立したといわれる弘願本、古徳伝、九巻伝、四十八巻伝になると、四十三才を黒谷離別の年とし、それ以前に善導の浄土教への帰入があつたとしている。

(但し四十八巻伝は善導浄土教帰入を四十三才とし、帰入即黒谷離別としている)

それで諸伝記を通じて考えられることは、四十三(二)才、またはこの時を去ること遠からざる時期に浄土門への帰入があつたことである。その契機として古い伝記では恵心の往生要集が強く打出され、後世のものは善導が強く画かれていることである。

而て私日記、醍醐本、四巻伝が書かれたときは、法然上人の門弟が未だ生存していた時代であり、且つ天台教団、南都仏教教団より熾烈な迫害が行われていた時であつた。しかしこれらの伝記は法然上人に直接面接した人、またはそれらの人の見聞を基礎として書いたものであるから全然虚偽のことが書かれているとは思われない。これらの伝記作者の関心事は法然上人が黒谷を離別されたということよりも、いつ浄土門に帰入されたかが問題であつた。しかし浄土門帰入ということは精神的のものであるからいかに面接の弟子連であつてもこの信仰転換の時期は明確につかむことが出来ない。それで恵心僧都が往生要集を著したのが四十三才であり、最澄が天台宗立教の公許を得たのが三十九才であり、四十三才の時には年分度者八人を賜わっているから、かかる点より考えて弟子達が承安五年四十三才をもつて浄土門帰入の年としたのであろう。四十三才という年齢については、四十才でも四十五才でもよいのであつて、とも角

この頃に思想の大転換のあつたことを弟子達は知っていたのである。その転換の契機が恵心の往生要集であるか、善導の觀經疏であるかは、弟子達または伝記作者の主観によつて異なる。而て後世成立の伝記になるほど往生要集の影が薄くなり、善導の觀經疏が強く打出されると共に、黒谷離別が重視され、選択集に説く捨聖帰淨の理論をもつて、これを解し、黒谷離脱即淨土門開宗としてゐるのである。それで椎尾博士並にその他の学者がいう如く、六十才を過ぎてから思想に大転換があつたとは、弟子達は誰れも認めていなかったのである。

しかし淨土門の独立を明確にうたわれたのは選択集である。しかしかかる選択集の思想を生み出す母体となつたものは善導の淨土教であるから、善導の淨土教への帰入を重視するか、選択本願念仏思想の樹立を重視するかによつて、淨土開宗年次が異なるのはいうまでもない。法然の弟子達は善導の淨土教帰入を重視し、椎尾博士等の新説は選択本願念仏思想樹立を重視するのである。ただここで注意すべきことは古い伝記。醍醐本では淨土門帰入の契機を往生要集とし、次に成立した伝記（古徳伝、九卷伝）では善導の觀經疏が強く打出され、一番後に成立したといわれる四十八卷伝では善導の淨土教へ帰入即淨土門の独立、叡山の離別が強く画かれてゐることであつて、四十才過ぎの思想転換に對して、諸伝記は三段に変化してゐる。殊に四十八卷伝では「淨土開宗の卷」なる題名のもとに善導の淨土教への帰入が書かれてゐる。しかるにこの四十八卷伝の底本といわれる九卷伝では、この記事が「住吉水念仏弘通事」なる題号のもとに記され、それ以前の成立の伝記には「淨土開宗」、またはこれに類似する語句を見出すことが出来ない。それで四十三（二）才の淨土門帰入をもつて淨土開宗としたのは四十八卷伝より始まる様である。

されば椎尾博士等の諸学者が主張する如く選択本願念仏説樹立の時をもつて法然の浄土開宗の年次とするか、または四十八巻伝の著者の如く、選択本願念仏説樹立の母体である善導浄土教への帰入をもつて開宗年次とするかは観点の異により両説ともに成立つと考えるのである。

(本学 教授)